

「哲学対話」という言葉を5年ほど前に聞いた。ちょうど高校にいるときだった。それ以来、ずっと気になっていた。

哲学対話とは、対話の参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていくという対話のあり方のことである。近年、日本でも哲学対話の実践が普及するようになってきた。日本における実践は、アメリカで始まった「子どものための哲学」やフランス発の「哲学カフェ」などが原点とされている。

哲学対話のよさは、一人ではなく他者と共に考える点にある。一人で考えると行き詰まることしばしばあり、そこで思考を放棄してしまうこともある。一方、他者と共に考え合うことは、思考を共有し、視野を広げ、意見を深める効果がある。そして、根本的には、他者と共に考え合うことは楽しいものである。

哲学対話を行う場合は、趣旨やルールの説明が必要である。何のために行うのか、どのように行うのか、対話の目的とルールについての共通理解が対話を促進する土台となる。対話のルールは、以下のようになる。

- ①何を言ってもいい。
- ②人の言うことに対して否定的な態度をとらない。
- ③発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
- ④お互いに問いかけるようにする。
- ⑤知識ではなく、自身の経験に即して話す。
- ⑥話がまとまらなくてもいい。
- ⑦意見が変わってもいい。
- ⑧分からなくなってもいい。

参加者それぞれに問いを考えてもらい、多数決でその日の問いを決める。哲学対話では、参加者が考えたい問いをそれぞれ出し合う。本気で考えたいからこそ、参加者が議論に集中するようになる。進め方としては、対話の適正人数は10～15名程度、多くても20名程度である。したがって、クラスを2つに分けて実施するのがよい。具体的には、以下のようになる。

- ①輪になる。
- ②話したいときには手を挙げてボールを受け取って話す。
- ③ボールを持っている人だけが話す。
- ④人が話している間でも手を挙げていい。
- ⑤他の人が手を挙げて、あわてず最後までゆっくり話す。
- ⑥話し終わったら、手を挙げている人の中から選んでボールを渡す。

高校生はもちろんだが、中学生でもできそうである。小学生でも「学びとは何か」「存在とは何か」などの実践がある。「学びとは、自分自身の問いと気づきを通して、生が豊かになっていく営みである」「存在とは、言葉になるすべてのものである」という方向でまとまっていった。子どもたちの力はおそろしい。

この哲学対話を、野田中学校でやりたいとずっと思っていた。だが、コロナの状況が、それを許してはくれなかった。ようやく機が熟してきた感がある。これから具体化したい。